

英米の俗信 (3)

小泉 直

外国語教育講座

The Superstitions of Britain and the United States (3)

Naoshi KOIZUMI

Department of Foreign Languages, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

本稿は、英米に古くから伝わる俗信の起源と内容を明らかにすることを目的とする研究の一部を成すものである。これまでに小泉 (2012) では「日用品」、小泉 (2013) では「身体」と「数字」に関する俗信について解説した。本稿では、新たに「行為・生理現象」、「色」、「天体」にまつわる俗信を取り上げる。

1. 行為・生理現象

1.1 焼くこと (Baking)

昔、オーブンは、ふじづるや柳などのしなやかな小枝 (with) によって縛られた薪の束を燃やして暖められていた。サセックス (イギリス東南部の旧州) では、そのような小枝が誤ってオーブンの中で焼かれると、そのオーブンは熱くならないので、パンが焼けないと言われていた。

パンを焼く準備をした後に残った生地は全部使い切らなければならない。余りを捨てるとパンがすべて台無しになり、災難に見舞われると考えられていたからである。そのために、余りを利用して子供向けの焼き菓子が作られた。

オーブンから取り出した後にパンや焼き菓子の数を数えるのは縁起が悪い。そんなことをすると、すぐに腐ってしまう。

オーブンを開けた時にパンが割れていたら、それは見知らぬ人が分け前をもらいにやってくる印である。

1.2 水浴 (Bathing)

イギリスでは1年のうちで水浴を行う時期について次のような歌が記録されている。

He who bathes in May will soon be laid in clay
He who bathes in June will sing a merry tune
But he who bathes in July will dance like a fly.
5月に水浴する人は、すぐに墓地の中、

6月に水浴する人は、楽しい歌を歌う、
だが、7月に水浴する人は、ハエのように舞い踊る。

世界の多くの地域で身体をくまなく洗うと運も洗い流されると言われていた。ウェールズでは、坑夫たちの中に、身体をすべて洗うと坑道の天井が落ちてくるのではないかと恐れ、意図的に背中を洗わない者がいた。

足から水に浸かるのは縁起が悪いという古い俗信があるが、この俗信は医学的に理にかなっている。頭を先に濡らせば、血圧が上がって頭痛を引き起こす可能性が減るからである。

1.3 借用 (Borrowing)

今日、やりくり上手な親が子供に言い聞かせる決まり文句に「絶対に貸し借りをするな (Never a lender or a borrower be)」がある。1年のある時期、すなわち、2月の最初の3日間と3月の最後の3日間は、何かを借りるのに特に縁起が悪いと言われていた。スコットランドでは、これらの日に借金をするのは不運を招くだけでなく、種を蒔くのも控えた方がよいと忠告された。

ヨークシャー (イングランド北東部の旧州) では、リンゴなどの果物を切るためにナイフを借りたら、それを笑いながら返さなければ悪運に見舞われると言われていた。

1.4 料理 (Cooking)

平鍋の中の水を沸騰させてはいけない。そんなことをすると、恋人が蒸発していなくなる。喧嘩になるといけないので、鍋を他の人と一緒にかき混ぜてはならない。具は、太陽の運行と同じ方向、つまり時計回りがかき回さなければならない。

1.5 咳 (Cough)

イギリスで信じられている咳の治療法の1つに、患者に気づかれないように大麦湯の中でカタツムリを2、

3匹茹で、その煮汁を飲ませるといふものがある。別の治療法として、患者の頭から毛を1本抜き、それをバターを塗った2枚のパンの間に挟んで「御機嫌よう。お前が病気になって、私が治りますように。」と言いながら、イヌに与えるといふものがある。こうすることで咳が患者からイヌに移ると信じられている。

1.6 指を交差させる (Crossing the Fingers)

指を交差させる通常の方法は、人差し指の上に中指を被せるといふものである。これは聖アンデレ十字¹として知られているもので、幸運を引き寄せ、神の加護を受けるのに役立つとされる。

賭け事をする時には、指を交差させることによって運気を高めることができる。また、凶運を避けるためにも指を交差させるとよい。そのよい例は、誰かに邪眼²で見つめられていると感じた時である。

誰でも時には嘘をつくが、他人の感情を傷つけないことが必要な場合もある。小さな嘘をつく時は指を交差させることで害を未然に防ぐことができる。

1.7 夢 (Dream)

よく知られている俗信は、同じ夢を3回続けて見ると正夢になるといふものである。朝目覚めた時に夢を見ていた記憶があるが、どんな夢であったか思い出せないのは幸運である。もし覚えていたら、朝食後までその夢を他人に言ってはならない。

ウェールズの言い伝えによると、夏至祭³の前夜に集めて枕の下に置かれたヤドリギ (mistletoe) の小枝は予言的な夢をもたらすといふ。ヨークシャー (イングランド北東部の旧州) では、愛する人の夢を見なければ、ウサギの肩甲骨に9本のピンを刺すとよいと信じられている。それを枕の下に置けば、必ず夢の中で会えるといふ。

Nightmare (悪夢) という言葉は悪霊を表す。その悪霊はたいていウマの形をしていて、夜中に現れて寝ている人の上に座ると言われている。座られた人はその重さで呼吸困難となり、異常なほど悪い夢を見るという。そのような苦痛を取り除くためには、靴下をベッドの下に十字形になるようにピンで留めておくといふ。またランカシャー (イングランド北西部の州) では、靴のつま先を外側に向けてベッドの下に置いておくといふ悪夢の予防になると信じられていた。19世紀には、ベッドの足元にナイフなどの鋼鉄製品、あるいは、一片の鉄を置いておくといふ方法も流行した。

1.8 溺死 (Drowning)

よく知られた俗信に、溺死する者は死ぬ前に3回水中に沈むといふものがある。また、溺死体は7日後、あるいは、8日後か9日後に水面に浮かんでくると言われている。何日後になるかは地域によって異なる。

川底で溺れた死体は、水面に沿って銃を発砲すれば水面に浮かび上がってくるという。これは銃声によって溺死者の胆嚢が破裂するからであると考えられている。

死体のありかを見つける方法については、火を灯した蠟燭、あるいは、多少の水銀を入れたパンの塊を水に浮かべると、やがて溺死体のある場所に漂着するといふ言い伝えがある。

警察官の間では、男性の溺死体はうつぶせで漂うが、女性の溺死体は仰向けで漂うと言われている。

1.9 酩酊 (Drunkenness)

長年の間、人々は酔いを醒ますさまざまな方法を考えてきた。それらの多くは酒を飲む人のグラスの中に不快な物を入れるといふものであった。中でも驚くべき方法は、生きたウナギを入れるといふものである。また、ウェールズの言い伝えによると、ブタの肺を取り出して火であぶり、それを1日断食した後で食べれば、どんなに飲んでも酔わないという。

1.10 漁 (Fishing)

海に行く直前に漁師が女房と喧嘩をすると豊漁が期待できる。ただし、喧嘩は自発的なものでなければならぬ。また喧嘩で女房が血を流したら、それも大漁の前兆である。

ヨークシャー (イングランド北東部の旧州) では、漁船に向かう途中で白いエプロンをつけた女性に会うのは縁起が悪いので、もし出会ったら、その日の漁をあきらめ、家に戻って次の潮時を待った方がよいと言われている。

船に乗り込んだ後、牧師や教会やブタという言葉の口に出したら、必ず運が悪くなる。また、スコットランドでは、みだりに神の名を口にしたら、乗組員全員がすぐに近くにある鉄製品をつかまなければ悪運に見舞われると信じられている。

釣った魚の数を数えてはならない。数えると、その日はそれ以上魚が釣れなくなる。また、右利きの人は、左手で釣り糸を放ってはならない。そのようなことをすると、びくが空のまま終わることになる。

漁師の間では、釣り針を水中に投げる前に餌に唾をかけておくといふように釣れるようになると思われている。

釣竿は折れない限り、釣りをしている間に換えない方がよい。また、魚が釣り針にかかるまで、漁網を水中に入れない方がよい。さらに、釣りをしている最中は、ロブスターを獲るためのかごわなや逆さまにしたバスケットの上に座らない方がよい。

スコットランドでは、魚が餌に食いつかない時は、乗組員の1人を海に放り投げ、すぐに魚のように引き上げれば食いつくようになるという。

1.11 賭け事 (Gambling)

よく知られた言い伝えに、初めて賭け事をする人には、初心者の幸運 (beginners' luck) があるので必ず勝つというものがある。また、賭博師の間では、借りたお金で賭け事をするとうけることがないと信じられている。

賭け事をしに行く途中で背むしの男性に会うのは縁起がよいと言われている。しかし、賭け事では席に着く前に女性に自分の肩を触らせてはならない。また、賭け事をしに行く途中で女性に会うのも避けた方がよい。

賭け事をする日には縁起の良い日と悪い日がある。一般に金曜日の午後6時より前は凶であると考えられている。

カードゲームについては悪運を避けるための禁忌が数多く存在する。例えば、

- ・ゲーム中は感情を抑えることが重要であり、かんしゃくを起こすと負ける。
 - ・どのような状況であっても、プレイヤーはカードを左手で取ってはならない。
 - ・つきを消す (cross out) かもしれないので、足を組んで (cross) 座ってはならない。
 - ・配り手がカードを配り終えるまでカードに触れてはならない。
 - ・チップはテーブルの上にきちんと積んでおいた方がよい。
 - ・ゲーム中に口笛を吹いたり、歌ったりしてはいけない。
 - ・肩越しに自分のカードを覗かれるとつきを失うことになる。
 - ・イヌをつれてゲームをするのは縁起が悪い。
 - ・光沢のあるテーブルの上でゲームをすべきではない。緑の布でおおわれたテーブルの上で行うのがよい。
 - ・ゲーム中にカードを床に落とすのは凶兆である。
- などがある。

一方、つきを変えるための方法としては、

- ・カードを切りながらカードに息を吹きかける。
- ・自分の椅子あるいはテーブルの周りを3度回る。
- ・椅子の向きを反対にし、跨って座る。
- ・ハンカチを敷いてその上に座る。
- ・封を切っていない新しいカードを使う。

などがある。

プレイヤーの間ではスペードやクラブなどの黒いカードは縁起が悪いとされている。特にスペードのエースは死を表すことから最も恐れられている。また、クラブの4は「悪魔の4柱式寝台 (Devil's Four-Poster Bed)」と呼ばれ、このカードが配られたら決してよい手にならないと信じられている。さらに、エースと8のツーペアを持っていると勝つことができなと言われていいる。これは「死者の手 (dead man's hand)」とし

て知られていて、アメリカ西部開拓時代の伝説の保安官、ワイルド・ビル・ヒコック (1837-1876) が殺された時に持っていた手だからである。

1.12 シャっくり (Hiccups)

ヨーロッパの古い俗信では、シャっくりが出るのは、誰かがあなたのことを悪く思っているからであると言われていた。また、もし教会でシャっくりが出たら、その人は悪魔に取りつかれているからだと考えられていた。

イギリスで定評のある治療法に、息を吸わずに100まで数える、あるいは、シャっくりをしている人の背中に冷たい鍵をすべらせる、というのがある。コーンウォール (イギリス南西端の州) では、左手の人差し指をつばで濡らし、主の祈り⁴を逆から唱えながら左足の靴の前を3回横切ると、シャっくりが止まると信じられている。アメリカでは、大きな音で脅かせば、シャっくりはたいてい止まると言われている。

1.13 キス (Kiss)

幼い子供は言葉が話せるようになるまでお互いにキスをしてはならない。さもないと、生涯耳や口が不自由になるか、無差別に愛情を示す愚かな大人になる。

初めて紹介された子供が自発的にキスをしてくれたら非常に幸運である。それは健康と長寿の予兆だからである。

独身女性が口髭のある男性とキスするのは極めて危険である。もし女性の唇に毛がついたら、一生結婚できなくなる。また、若い女性が色黒の男性に思いがけずキスされたら、すぐにプロポーズされることになる。

相手の鼻にキスするのは、2人の間に不和が生じることになるので、避けた方がよい。同様に、相手の背中にもたれかかって頬にキスするのは、自分の背中を刺される危険があるので、勧められない。

1.14 笑い (Laugh)

笑いは健康によいが、笑いすぎは凶兆と見なされている。なぜなら、その人は浮かれた感情に支配されているため、それほど長く生きられないと考えられるからである。

1.15 化粧 (Makeup)

アメリカの言い伝えによると、おしろいや化粧をこぼすのは友達と喧嘩をする前兆である。

1.16 殺人 (Murder)

一般に、殺人を目撃する、あるいは、地面に横たわっている死体のそばを通り過ぎるのは不吉であると考えられている。

かつて殺人の犠牲者の死体は殺人者に触れられると血を流すと信じられていた。また、殺人者の姿は犠牲者の眼球に永遠に焼きつくと言われていた。

1.17 指差し (Pointing)

何かを指差すことは、行儀が悪いだけでなく、縁起が悪いと考えられている。特に出港する船を指差すと、その船は沈むことになると思われている。また、天にある物を指差すことは神への冒瀆となるので慎むべきである。

1.18 針仕事 (Sewing)

金曜日に服を縫い始めると、着る人に悪運がもたらされるので縁起が悪いと思われている。しかし、その日のうちに縫い終えてしまえば別である。また、土曜日と日曜日の針仕事も好ましくないと考えられている。

糸を扱っている間に結び目ができたら、まもなく針子は誰かと喧嘩をすることになる。一方、うっかり針を床に落とすのは幸運の印である。ただし、その針が床に刺さったら縁起が悪い。

アメリカでは、服を縫っている間に針子が指ぬきをなくしたら、最終的にその服を着る人が幸運を授かると思われている。ただし、着る人が針子自身であれば、これは当てはまらない。

1.19 握手 (Shaking Hands)

左手で握手をするのは縁起が悪い。もし別れる前に2度握手をしてしまったら、悪運に見舞われないように、もう1度握手をした方がよい。4人の人が交差して同時に握手するのも縁起が悪い。これが偶然起こってしまったら、降りかかる凶運を避けるために、その4人は自分の胸の前で十字を切った方がよい。しかしながら、2組の男女が交差して握手をすると結婚話が持ち上がるという言い伝えもある。

1.20 身震い (Shivering)

熱の兆候ではない突然の身震いは悪い前兆である。それは死が近い印、あるいは、あなたが将来埋葬される墓の上を誰かが歩いているからであると信じられている。

朝起きた時、あるいは、敷居をまたぐ時に身震いをしたら、それは悪い1日になる印である。しかし、寝る前に身震いをしたら、楽しい夢をたくさん見る素晴らしい夜が約束される。

1.21 歌うこと (Singing)

「朝食前に歌うと夜までに泣くことになる (If you sing before breakfast, you will cry before night.)」というよく知られたことわざが示すように、朝から歌うこと

は縁起が悪いと見なされている。これは、朝からうかかっていると危険な目に会うという古代ギリシャ人の考えに由来するようである。彼らにとって幸せは1日努力して手に入れるものであった。それゆえ、朝一番に歌うことは、まだ手に入れていない幸せを先取りすることを意味した。

また、パンを作っている時、あるいは、カードゲームをしている時に歌うのも縁起が悪いとされる。

1.22 睡眠 (Sleep)

地球が丸いということが発見されて以来、奇妙な俗信が生まれ、今日でも真面目に受け止められている。それは、頭は常に北に向けて寝るべきであるというものである。そうすれば、身体が地球の磁気の波動と一致するので、平穏で安らかな眠りが得られることになる。また、別の俗信では、寝ている間の頭の向きがその人の未来を決めると言われている。すなわち、北向きは短命、東向きは富、南向きは長寿、西向きは旅の予兆であるとされる。

夢遊病になるのは、洗礼の仕方が悪かったのであるから、儀式をもう一度最初からやり直すべきであるという言い伝えがある。また、迷信深い人々は、寝ている間は魂が身体から離れて危険な状態に置かれることになると思っている。そのため、夢遊病患者は、魂が身体に戻る機会を失うといけいので、突然起こしてはならないとされる。

最近まで、植物は部屋の酸素を吸収するので、夜は病室に置いてはいけないと考えられていた。

もし女性が働いている間に寝てしまったら、男やめと結婚すると言われていた。

結婚式の夜は、新郎新婦のうち最初に眠りについた方が先に亡くなるという言い伝えもある。

1.23 くしゃみ (Sneezing)

誰かがくしゃみをした時に「お大事に (God bless you)」と言うよく行われている習慣は、くしゃみをすると魂が身体から抜け出てしまい、祈りの言葉だけが元に戻ることができるという古代の俗信に由来する。

一般に正午から深夜までのくしゃみは縁起がよいが、深夜から翌日の正午までのくしゃみは凶運の印であると言われている。また、朝食前のくしゃみは1週間以内に贈り物を受け取る前兆とされている。さらに、1回あるいは3回続けてくしゃみをするのは縁起が悪いが、2回続けてくしゃみをするのは縁起がよいとされる。幼い子供たちが繰り返して歌う古歌に、「1度なら願い、2度ならキス、3度ならもっとよいこと」がある。

右に向かってくしゃみをするのは縁起がよいが、左に向かってのくしゃみは縁起が悪い。また、2人が同時にくしゃみをする時、どちらの人にも幸運がもたらされるという。くしゃみが出そうで出なかったならば、

それは誰かがあなたを愛している印である。

次のマザーグースの歌が示すように、くしゃみをする曜日は未来を予測すると考えられている。

If you sneeze on a Monday, you sneeze for danger;
Sneeze on a Tuesday, kiss a stranger;
Sneeze on a Wednesday, sneeze for a letter;
Sneeze on a Thursday, something better;
Sneeze on a Friday, sneeze for sorrow;
Sneeze on a Saturday, sneeze your sweetheart tomorrow;
Sneeze on a Sunday, and the devil will have domination over you all the week!

月曜日のくしゃみは、危険を招き、
火曜日のくしゃみは、見知らぬ人にキスし、
水曜日のくしゃみは、手紙をもらい、
木曜日のくしゃみは、何かいいことがあり、
金曜日のくしゃみは、悲しみが訪れ、
土曜日のくしゃみは、明日恋人に会い、
日曜日のくしゃみは、これから1週間ずっと悪魔の言いなり！

スコットランドでは、馬鹿はくしゃみをしないと考えられてきたので、赤ん坊の最初のくしゃみは非常に重要であった。またスコットランドでは、赤ん坊はくしゃみをするまで妖精の支配下に置かれると信じられていた。

1.24 つまづき (Stumbling)

つまづきは凶兆であり、不幸や災難が待ち受けている印であると考えられてきた。なぜなら、運命は最後の警告として人をつまづかせるからである。

朝、家を出てすぐにつまづくと、その日1日運が悪いとされる。また、路上でウマがつまづいても悪運に見舞われることになる。墓のそばでつまづくのは特に不吉で、その人はまもなく墓に入ることになる。シェイクスピアは『ロミオとジュリエット』(第5幕第3場)の中で、ロミオの死体を発見する少し前、僧ロレンスに次のような台詞を述べさせている。

How oft tonight

Have my old feet stumbled at graves.

それにしても今夜は、

幾度老いの脚が墓石につまづいたことか！⁵

階段でつまづくのは結婚への確かな印である。しかし、同じ夜に結婚の夢を見たら、その印は死の前兆へと変わる。

1.25 自殺 (Suicide)

自殺した人の魂は次の世界へ進めず、永遠に地上をさまよっていると信じられている。また、自殺した人の墓の上を妊婦が歩くと流産すると言われている。

1.26 乾杯 (Toast)

昔、毒が入っていないことを確かめるために、相手のグラスの中に自分のワインを少し注ぐという習慣があった。やがて毒を盛るという行為は行われなくなったが、ワインを注ぐという習慣は、乾杯に反対する悪霊を追い払うためにグラスを触れ合わせて音を立てるという習慣へと変わっていった。

Toastという言葉はエリザベス朝時代にまで遡る。当時はエールやワインを注ぐ前にタンカード(金属製のジョッキ)の底に1枚の小さなトースト(焼いたパン)を置いた。そのトーストが沈殿物を吸収し、飲み物の味がよくなると考えられたからである。

乾杯をしている間に飲み物が少しこぼれるのは縁起がよいが、手の中でグラスが割れるのは不吉である。その場にいる人が1人近いうちに亡くなると信じられているからである。

1.27 木に触れる (Touch Wood)

木に触れる、あるいは、木をたたくという行為は多くの人にとってあまりにも馴染みが深いため、ほとんど俗信として認識されていない。しかし、実際には非常に長い歴史をもつ俗信である。「自分の幸福を吹聴する者は悲しみを招く (He that talks much of his happiness summons grief.)」ということわざが示すように、昔の人々は悪霊に自分の幸福を聞かれると、悪霊は嫉妬してその幸福を奪ってしまうと恐れていた。また、木、特にオークの木には親切的な精霊が宿っていると信じられていた。そこで、自慢した時などは罰を受けることがないように、木に触れて自分を守ってくれるようお願いをした。

木を2, 3回たたくのは、その音によって悪霊を追い払うためである。

1.28 旅行 (Travel)

シリアのキリスト教殉教者である聖クリストフォロス (?-250?) は旅人の守護聖人である。多くの人は旅行中の幸運と安全のために聖クリストフォロスのメダルを持ち歩く。

旅立つ者は自分の家を振り返ってはいけぬ。家に戻るまで悪運に見舞われることになるからである。また、別れのために手を振った後、相手が見えなくなるまで見送るのも避けたほうがよい。その人と2度と会えなくなるかもしれないからである。

1.29 Vの印 (V-sign)

人差し指と中指で作るVサインが勝利を意味することはよく知られているが、この印は第2次世界大戦中、イギリスの偉大な政治家であるウィンストン・チャーチル(1874-1965)によって普及した。しかし、この印にはもう1つの意味があり、指を下に向けると

悪魔の角 (the Devil's horns) を表す。このしぐさを作ることにより悪魔は強制的に地獄に戻されると言われている。

1.30 歩くこと (Walking)

友達と歩いている時に道に障害物があったら、2人で同じ側を歩いた方がよい。別々に分かれて歩くと悪運に見舞われることになる。しかし、どちらかが「バターつきパン (bread and butter)」と言えば悪運は回避される。また、歩いている途中で縁石につまずくのも縁起が悪い。来た道に戻って、もう一度縁石を無事に乗り越えないと不運を招くことになる。

多くの人は歩道の裂け目の上を歩くと悪運に見舞われると信じている。この考えは裂け目が直接墓に通じているという古い俗信に由来している。この俗信から、次のような子供の歌が生まれた。

Step on a crack, break your mother's back;

Step on a line, break your mother's spine.

裂け目を踏むと、母親の背中が折れる。

線を踏むと、母親の脊柱が折れる。

後ろ向きに歩くのも悪運を引き寄せるので、止めた方がよい。

1.31 洗うこと (Washing)

2人の人が同時に同じ水で手を洗ったら、どちらか1人が水に唾を吐かなければ、悪運に見舞われると考えられている。また、身体を洗った水には魂の一部が含まれているので、注意深く処理しなければならない。この水を手に入れた者は、手を洗った者に対して魔術的な影響力を及ぼすことができるからである。

後の人生で富が容易に得られるように、子供の右手は生まれてから1年間洗わない方がよい。

新月が出ている間に新しい服を初めて洗濯すると、その服は長持ちしないと信じられている。

スコットランドとイングランド北部では、元旦に洗濯をすると家族の1人が洗い流されることになると言われている。

聖金曜日 (Good Friday)⁶は洗濯にとって最も縁起の悪い日である。この日、磔刑に向かうキリストを洗濯女が卑しい言葉で罵ったからである。

月曜日は洗濯するのに理想的な日と考えられてきた。マザーグースには、家庭で洗濯をする曜日について次のような歌がある。

They that wash on Monday, have the whole week to dry.

They that wash on Tuesday, are not so much arye.

They that wash on Wednesday, will get their clothes so clean.

They that on Thursday, are not so much to mean.

They that wash on Friday, wash for their need.

But they that wash on Saturdays, are dirty folks indeed!

月曜日に洗濯する人は、まる1週間乾かせる。火曜日に洗濯する人は、あまり予定通りに行かない。

水曜日に洗濯する人は、服がとてもきれいになる。

木曜日に洗濯する人は、あまりやる気がない。

金曜日に洗濯する人は、必要に駆られてやる。

土曜日に洗濯する人は、本当に汚いやつらだ!

1.32 食器洗い (Washing Up)

食器が割れたら、その日のうちに食器がもう2つ破損することになる。それゆえ、食器を割った後は1日中注意が必要である。しかし、それ以上食器が割れるのを防ぐ方法が1つある。それは古い陶磁器を2つ意図的に割ることである。こうすることで高価なガラス器や陶磁器を失わずに済む。

1.33 口笛 (Whistling)

口笛を吹くことは特定の場所において非難の的になる。例えば、

- ・坑夫が鉱山で口笛を吹くと爆発が起こる。
- ・船乗りが船上で口笛を吹くと強風に出会う。
- ・俳優が劇場内や楽屋で口笛を吹くと上演中の作品が失敗に終わる。

と信じられている。

口笛を吹く女性と鳴き声を上げる雌鶏は出会うと縁起が悪いと考えられている。これはキリストを処刑するために使う釘を作っている間、そばで女性が口笛を吹いていたからであるという。

1.34 願い (Wish)

願い事をするのにふさわしい機会というものがある。例えば、

- ・手のひらがかゆい時
- ・クリスマスのプディングをかき回している時
- ・新しい服を初めて切る時
- ・願いの井戸 (wishing well) に硬貨かピンか小石を投げ入れる時
- ・暢思骨 (wish bone) を引っ張って、大きい方を手にした時
- ・夕方に一番星を見つけた時

などがある。しかし、願い事をする機会として最も親しまれているのは、誕生日ケーキの蠟燭を吹き消す時であろう。

1.35 あくび (Yawning)

ほとんどの人はあくびをする時に手で口を覆うが、このマナーは、口を大きく開けていると悪霊が身体の中に入ってくるという中世の俗信に由来する。また、あくびで長い間口を開けていると魂が身体から抜け出てしまうとも考えられていた。

2. 色

2.1 黒 (Black)

黒は災厄や死と結びつく不吉な色と見なされてきた。西洋では伝統的に葬式で黒の衣装が着用されるが、多くの人はいがこれが死者に対する敬意のためであると思っている。しかし、実際には、これは死の前では人間は取るに足らない存在であるという古代ローマ人の認識に由来する。

魔女はたいいてい黒い衣装を身にまとっているが、彼女たちが信頼する使い魔 (familiar)⁷もまた黒ネコなどの黒い色の動物の姿で描かれることが多い。悪霊は黒い色の動物が好きであると言われている。そのため、悪霊に出会ったら、何か黒い物を差し出し、悪霊がそれを称賛している間に逃げるとよい。

2.2 青 (Blue)

青は海と空に結びついている。また、幸福の青い鳥のように、探し求めてもなかなか得られない物の象徴でもある。

よく男の赤ん坊には青い服を着せるが、これは悪霊が新生児の周りに集まるという俗信に基づいている。これらの悪霊は青が自分の力を奪うことから、この色をひどく嫌う。その結果、防御のために赤ん坊に青い服を着用させるようになった。昔は女の子が男の子ほど重要でないと考えられていたで、特に予防策が採られてこなかった。しかし、この考えが差別的であると気づいてからは、女の子にピンクの服を着せるようになった。

2.3 緑 (Green)

緑は自然の色であり、豊穡の象徴でもある。しかし、緑はすべての色の中で最も縁起の悪い色と見なされてきた。これは妖精や精霊が緑色の服を身につけていると考えられたからである。妖精たちは地下に住み、春になると成長する物すべてに自分たちの色を与える。彼らはこの任務を大変重要であると考えているので、この色を身につけようとする者に対して不運をもたらすのである。

花嫁は自分の結婚衣装に緑色の物を使うと悪運に見舞われると言われている。

多くの俳優は舞台上で緑色の服を着ると劇と俳優に不運がもたらされると信じている。

2.4 赤 (Red)

赤は血の色であり、超自然の強力なエネルギーをもつので、魔女や悪魔を怖がらせると信じられてきた。そのため、農夫は春にウシを初めて牧草地に放つ時、しっぽに赤い糸を結ぶ。また、赤い糸は鼻血やリウマチを治すためのまじないの中でも使われてきた。さ

らに、女の子の髪に結びつけられた赤いリボンは思春期を迎えるまでその身を守ってくれると信じられている。

赤毛の人は激しい気性の持ち主なので、赤毛の人に会うのは縁起が悪いと言われている。特に元旦に会うのは不吉である。また、赤毛の子供は不誠実な母親の下に生まれると考えられている。

2.5 白 (White)

白は純潔や神聖を象徴する。白はまた防御の色とも考えられていることから、結婚式で女性が好む色である。こうした肯定的な意味をもつにもかかわらず、白には否定的な面もある。例えば、白いネコ、白い野ウサギ、白いウマを見たら、唾を吐いた方がよい、あるいは、片方の親指を舐めて、それをもう一方の手の平に押しつけるとよいと信じられている。こうすることで悪魔を追い払い、悪運を避けることができる。

ユリとライラックは葬式と直接結びついているので、屋内に置いてはいけぬ。ただし、赤以外の色の花と一緒にあれば、屋内に持ち込んでもよい。

2.6 黄 (Yellow)

一般的に黄色は臆病や病気と結びつく不吉な色と見なされている。イギリスでは、マメ科の植物に黄色い葉がつくと、それは家族の中に死人が出る前兆であり、悪魔でさえこの色を恐れるという。

3. 天体

3.1 食 (Eclipse)

何千年もの間、天における異常な変化は疑惑と畏怖の念を持って見られてきた。ある天体からの光が別の天体の存在によって遮られる食は、そのよい例である。

食の影響は当日および前3日と後3日の計7日間に及ぶと言われている。この7日間は静かにしているのが賢明であり、何か新しい事業に着手すべきではない。

3.2 月 (Moon)

人類に知られる最も古い暦は、太陽や季節ではなく月によって時の移り変わりを記していた。それゆえ、月は長い間神聖な存在と見なされてきた。

月に関して最もよく知られた俗信は、満月をあまりにも長く見つめていると気がおかしくなるというものであり、「狂気の (lunatic)」という言葉は月を意味するラテン語の luna に由来している。実際イギリスでは、1842年の月狂条例 (Lunacy Act) で月の最初の2つの位相 (phase) の間は正常であるが、満月になると精神的に病む人を狂人と定義していた。また、別のよく知られた俗信に、顔が歪むか気が狂うことになるので、

顔に月の光を浴びながら寝てはならないというものがある。しかし、満月は若い女性が結婚できるかどうかを知るよい機会でもある。満月の前に絹のハンカチをかざし、見える月の数が結婚までに待たなければならない年（あるいは月）の数を示すと言われている。

満月の時には大出血を引き起こすかもしれないので、緊急事態でない限り、手術は受けない方がよい。また、新月の時には感染の危険が高まるので、やはり手術を避けた方がよい。

田舎では植物の種は月が満ちていく時に蒔くのがよいと信じられている。ただし、サヤインゲンやエンドウはつるが反時計回りに巻きつくので、月が欠ける時に蒔いた方がよい。田舎ではまた、月が満ちていく時にブタを殺すと脂身の多いベーコンができると信じられている。一般に月が欠けていく時は悪い影響を受けるので、結婚や出産には不向きとされているが、飢えることがなくなるという古い俗信のため、引越しには適していると言われている。

新月に対してはお辞儀をして常に敬意を払わなければならない。新月を木の枝やガラス越しに初めて見るのは縁起が悪いとされる。また、新月を右の肩越しに見るのは縁起がよいが、左の肩越しに見るのは縁起が悪いとされる。新月を見ながらポケットの中で銀貨をひっくり返すと、次の新月までに量が2倍になるといふ言い伝えもある。

1年の最初の新月に話しかけることで、将来の伴侶の姿を見ることが出来る。一般的には、月をじっと見つめて次のように言えばよい。

All hail to thee, moon, all hail to thee,

I prithee kind moon, reveal to me,

Him/Her who is my life partner to be.

お月様、御機嫌よう、

親切なお月様、どうか見せてください、

私の人生の伴侶となる人を。

この後、夢の中で将来の伴侶と出会うことになる。

イングランド南部では、1つの暦月に2つの月が現れると次の新月まで悪天候が続くと信じられている。

3.3 星 (Star)

マザーグースの歌には、暗くなって最初に見る星に次の言葉を唱えながら秘密の願い事をするとかなうというものがある。

Star light, star bright,

First star I see tonight,

I wish I may, I wish I might,

Have the wish I wish tonight.

明るい星よ、輝く星よ、

今宵目にする一番星よ、

かなえてほしい、

今宵の私のこの願い。

神々を侮辱することになるので、星を指差してはならない。もしそのようなことをすると、指差したまま固定して元に戻らなくなる。また、星を数えるのもよくない。もし数えると、指の爪に白い斑点が現れることになる。

多くの人々は自分たちを導いてくれる特別な星があると信じている。もしその星が上り調子であれば、運勢はよくなるが、下り調子であると、苦勞が待っている。

流れ星は赤ん坊の誕生や誰かの死を告げていると信じられてきた。流れ星を見た時には願い事をするといふが、願い事は消え去る前に終えなければならない。ウェールズでは、流れ星に願い事をかけ損なうと1年間悪運に見舞われると言われている。アメリカでは、貧困に対する対処法として、流れ星に向かって「お金」という言葉を3回唱えるとよいと言われている。

3.4 太陽 (Sun)

昔の人々は太陽を畏れ神として崇めていた。それゆえ、太陽を指差すような侮辱的な行為は禁じられていた。

日の出の直前に集めたサンザシ (mayflower) を顔に当てると、そばかすができないと信じられてきた。

ウェールズでは、非常に悲しい出来事や国家的な災害が起こる前に太陽はその顔を隠すと言われている。また、日の出に生まれた子供は利口になるが、午後や日没に生まれた子供は怠惰になると言われている。

コーンウォール (イギリス南西端の州) では、偽証罪を犯した者の上に太陽は決して輝かないという。

おわりに

本稿では、英米に伝わる俗信の中から、特に「行為・生理現象」、「色」、「天体」にまつわるものを取り上げて、その起源と内容を明らかにした。

注

- キリストの12使徒の1人、聖アンデレ (St. Andrew) はスコットランドの守護聖人であって、その遺骨の一部は4世紀に、現在のファイフ (Fife) 州のセント・アンドルーズ (St. Andrews) に移されたと言われている。また、聖アンデレが磔刑に処せられた時につけられたとされるX型十字架の十字は、中世以来スコットランドを象徴する国旗になっている。(『イギリス祭事・民俗事典』p. 334参照)
- 昔から、悪魔の目すなわち邪眼を持つ人たちがいて、そのような人たちは、じっと見つめるだけで他人の健康や運命を悪化させることができると信じられてきた。特に、色違いの目、くぼんだ目、寄り目、やぶにらみの目を持つ人たちは邪眼の持ち主であるとして告発されてきた。
- 1年の中で昼間が最も長く、太陽が天空に最も高く昇る夏至は、実際には6月21日に当たる。しかし、中世以来「夏至

祭 (Midsummer Day)」は6月24日、つまり、洗礼者ヨハネの誕生日に振り当てられている。「ルカによる福音書」(第1章第36節)によれば、洗礼者ヨハネはキリスト生誕の6か月前に生まれたとされており、このことから洗礼者ヨハネの祭日が「キリスト降誕祭 (Christmas)」の6か月前に定められた。(『イギリス祭事・民俗事典』p. 250参照)

- 4 キリストが直接弟子たちに教示した祈り。「マタイによる福音書」第6章第6節から第13節と「ルカによる福音書」第11章第2節から第4節に記録され、「我らの父よ (Pater noster)」と祈る共同体としての基本的祈りである。したがって、初代教会以来、マタイによる福音書に基づいて、すべての典礼、聖務日課、礼拝、特に聖餐に必須の祈りとして繰り返し唱えられてきた。(『日本キリスト教歴史大事典』p. 664参照)
- 5 中野好夫訳『ロミオとジュリエット』新潮文庫より引用
- 6 復活祭の前の金曜日。キリストの十字架上での死を記念する日で、教会暦上最も厳粛な祭日。教会の飾りつけはすべて取り外され、鐘は終日鳴りを潜めたままで、時に鳴ることはあっても甲鐘に似た調べを告げる。(『イギリス祭事・民俗辞典』pp. 169-70参照)
- 7 常に魔女に仕えている地位の低い悪霊。ふつう動物の姿をしていて、ネコ、ヒキガエル、フクロウ、ネズミ、イヌなどが最も一般的である。(『魔女と魔法の事典』p. 256参照)

参考文献

- Batchelor, J. F. and C. de Lys (1954) *Superstitious? Here's Why!*, Harcourt, Brace and Company, Inc., New York. (横山一雄訳『アメリカの迷信さまざま』北星堂書店, 1962)
- Braysher, C. M. (1999) *Collins Gem Superstitions*, HarperCollins, London.
- 小泉直 (2012) 「英米の俗信 (1)」『愛知教育大学研究報告』第61輯 (人文・社会科学編) pp. 43-50.
- 小泉直 (2013) 「英米の俗信 (2)」『愛知教育大学研究報告』第62輯 (人文・社会科学編) pp. 53-61.
- Lasne, S. and A. P. Gaultier (1984) *A Dictionary of Superstitions*. Prentice-Hall, Inc. New Jersey.
- Lys, C. de. (1996) *A Treasury of Superstitions*. Gramercy Books, New York.
- Oliver, H. (2006) *Black Cats and April Fools*. John Blake Publishing Ltd, London.
- Pickering, D. (1995) *Cassell Dictionary of Superstitions*, Cassell, London. (青木義孝・中名生登美子訳『カッセル英語俗信・迷信事典』大修館書店, 1999)
- Potter, C. (1990) *Touch Wood: An Encyclopaedia of Superstition*. Michael O'mara Books Ltd, London.
- Radford, E. and M. A. Radford (1975) *Encyclopaedia of Superstitions*, Hutchinson, London.
- Rhodes, C. (2012) *Black Cats and Evil Eyes: A Book of Old-Fashioned Superstitions*. Michael O'Mara Books Ltd, London.
- Roud, S. (2004) *A Pocket Guide to Superstitions of the British Isles*. Penguin Books Ltd, London.
- Roud, S. (2006) *The Penguin Guide to the Superstitions of Britain and Ireland*. Penguin Books Ltd, London.
- The Diagram Group (2008) *The Little Giant Encyclopedia of Superstitions*, Sterling Publishing Co., Inc., New York.
- Waring, P. (1978) *A Dictionary of Omens and Superstitions*, Souvenir Press, London.

Zolar (1996) *Encyclopedia of Signs, Omens and Superstitions*, Souvenir Press, London.

辞典・事典

- 『イギリス祭事・民俗事典』チャールズ・カイトリー著 渋谷勉訳, 大修館, 東京.
- 『英語諺辞典』第二版, 三省堂, 東京.
- 『日本キリスト教歴史大事典』教文館, 東京.
- 『魔女と魔術の事典』ローズマリ・エレン・グイリー著 荒木正純・松田英訳, 原書房, 東京.

(2013年9月25日受理)